怒濤打ち寄せる鵜戸の荒磯

鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

ごあいさつ

宮司　佐師朝規

〃日向なだ鵜戸の巌をおもしろみ
神も御足をとゞめましけむ〃

此の歌は昭和五年勅題〃海辺巌〃で預選になりました八田知意氏（当時八十八才）のお詠みになったものです。

当神宮は国定公園日南海岸の鵜戸の丘陵の東北端の自然洞窟の内に鎮座ましまして、社地の一帯は山と海との風光に恵まれた豊かな地で有り、社背の大森林はうっ蒼として繁り昼尚暗く、社前の奇石怪礁は海中に聳えて風波の強い日は太平洋の怒濤が岩をかみ、泡沫をあげて萬雷が一時に轟くが如くで有ります。

又、風の穏な日は紺碧の海原は静かで沖行く白帆は点々として数える事が出来る程大景観をなす天下の絶勝の地であると思われます。

是非皇祖皇宗を御祀り致して居ります当神宮御参拝をおすゝめ致します。

かえるの出べソ

権宮司　佐藤美春

暖かい春の田植の頃でした。広い広い田圃にお水がいっぱい引かれました。其の広い広い田圃の中で、かえるさんが、楽しく泳いで遊んでいました。そして遊びつかれて、大の字になってねむってしまいました。このかえるさんは、でっかい出べソでした。雷さんが雲の上から、このかえるさんのでっかい出べソを見つけて、「うまそうだな、取って食べよう」と、ピカピカ、ゴロゴロやり出しました。かえるさんがびっくりして目を覚まし、大事な大事なおヘソを取られては大変と、両手でおヘソを隠して逃げ出しました。

しかし、広い広い田圃の真中では、隠れる処がありません。かえるさんは絶対絶命、真青になって、がたがた震えていました。その時でした。泥の中から声がして、「かえるさん、かえるさん、私がそのおヘソを預ってあげましょう」と、タニシさんが親切に申しました。かえるさんは大変喜んで、急いでおヘソをタニシさんに預って貰い、安心してじっとしてうずくまって居りました。雷さんはおヘソを取ろうと、一段とはげしくピカピカ、ゴロゴロ。なんなくかえるさんを捕まえました。あら不思議、かえるさんの腹に、でっかいおヘソがたしかにあったはずなのに、消えて無くなっていたので、雷さんはがっかりして、ゴロゴロ、ブツブツ言い乍ら、遠くへ行ってしまいました。雷さんが遠くへ行ったので、かえるさんはほっとして、大事な大事なおヘソはタニシさんが親切に預ってくれていて無事であったので、嬉しくて嬉しくて、「タニシさん有難うございました、有難うございました。」と、何べんもお礼を申してから、「預って下さった大事なおヘソを返して下さい」と申しました。ところがどうでしょう、おヘソを持っていないタニシさんが、かえるさんのでっかい出べソを抱いてみると、これは又何とも言われない良い心持なんです。そこでタニシさんは、おヘソを返したくなくなりましたので、「折角預ったのですから、もう少し預らせて下さい」と申して、蓋を締めて返しませんでした。可愛そうにかえるさんは、大事な大事なおヘソを返して貰えないので淋しく、おヘソの無い腹を撫で乍ら、悲しくて悲しくて、夜も眠れないで、今も田圃で、タニシさんに「カエセカエセ、カエセカエセ、カエセカエセ」とやかましく申して鳴いているのです。

これは、小さい子供に聞かせるお話であります。

さて、おヘソは親であり祖先であります。祖先と子孫との絆（きずな）であります。この尊い懐かしい親と言う字を、順を追って書いてみますと、「立木を見る」と書くのであります。親は立木を見る様であると言う意味であります。それでは親は立木の何処に当るかと申しますと、目に見える親として、大和民族の遠い祖先様は、イザナギ、イザナミの神様であります。

夫婦の神様であります。同じ様なお名前でありますが、最後の一字だけが違うのであります。ギ、ミ（ミキ）の神様であります。即ち幹の神様でありますから目に見える親は、立木の幹であります。そして枝は子供であります。それでは目に見えない親（祖先）は、立木の何処に当るかと申しますと、親の枕言葉を垂乳根と申しますから、根に当ります。立木の根は、立木が台風にも倒れない様に、しっかりと地の中に根を張り、年中日の目を見ないで真暗い土の中で不平も言わずに、黙々と働いて、土の中の養分を取って、地上の幹へ送って、只管、地上の立木の四季の楽しみを楽しみとして、安心をしているのであります。幹は根が地中から取って送ってくれた養分で太り、これらを更に枝の方へ送って、繁茂しているのであります。そこで此の立木の根を断ち切って

しまっては、もう此の木は繁茂する事が出来ません。遂には枯れてしまいます。私等も此の目に見えない親（祖先）の絆を断ち切ってしまっては、もう家は栄える事は出来ません。やがて子孫も滅びて絶えてしまいます。

こんにち世間は、少年の非行暴力が大問題となっておりますが、私等は目に見えない親（祖先）との絆を断ち切ってはおらないでしょうか。子供を守るのは親だけであります。子孫を守るのは祖先だけであります。私等は遠い祖先から受継いで来ましたこの魂（霊）をしっかりと次の世代に引継がなければなりません。其の引継いで行く大切な行事として、小さい事乍ら、朝夕の御飯のお初を、先づ神棚に、霊舎（祖先様）にお供えして、両手を合せ、遠い祖先様に感謝の誠を捧げる姿を、無言で子供に見せる事こそ、声を大にして叱るよりも、最も身近な家庭の大切な行事であり教育であると思うのであります。

報恩感謝の祈り

権祢宜　中武信明

我々は神に日々〝お蔭をいただいている〟と云う感謝の祈りをしているだろうか。苦しい時の神頼みといわれている様に、その時だけ神に祈る事が多い様な気がする。それが過ぎてしまえば、手を合わせる事も少なくなり祈る気持ちも薄らいでしまうのではないか。

その場限りの祈りで願いが叶うのなら誰でもするだろう。少し偏った考え方かもしれないが、願いが叶わなかった時「やっぱりだめだったか」と諦める前に己の日常生活を振り返り、自分なりに努力したか、神に頼り過ぎてはいなかったか、と云う事を己に問いかけるべきではないだろうか。自ら反省すべき点が出て来ると思う。こんな時には神の戒めだと思って日々過ごして行く中から何か得る物が見つけられると思う。

祈る事で医学では考えられないような事が起こる事がある。知人の子供が病で斃れ不治の病であると医者から宣告された。母親は以前から神に手を合わせていたが、その日から薬にも縋りたい気持ちで毎日神社に参拝した。その願いに神が手を差しのべられたのだろうか。日一日と元気になり今では学校に通学出来るまでになった。しかし母親は参拝を怠たる事なく神に感謝の祈りを捧げていると云う。この〝お蔭〟に感謝する事こそ最も大切な事ではないかと思う。

御成敗式目の中に、〝神は人の敬によって威を増し人は神の徳によって運を添う〟と記されている。神は人々がその高く尊き御神徳を仰ぎ奉り謝び奉る事によって愈々御神威を発揮され、人々は神の恩頼を戴き、その大御稜威を仰ぎ奉る事によって、益々幸せになる事が出来る、と云う意味である。これも報恩感謝の祈りに通じるのではないかと思う。

又、我々は日常生活の中においても多くの神の恵みを戴いている。しかし現在は何不自由なく過ごしているから、その事に対する感謝の念が薄れているのではないか。本居宣長翁の玉鉾百首の中の〝天地の神の恵みしなかりせば、一日一夜もありえてましや〟とか、修養道歌の〝生かされて生きるや今日のこの命、天地の恩かぎりなき恩〟と歌われている様に、大自然の恵みを忘れている様な気がする。早魃の続くエチオピア等の国々では、農作物は実らず家畜は死に何百万の人々が飢餓に苦しみ、雨の降るのを待ち続けているのである。これを思うと大自然の恵みがあるからこそ、我々は生活していけるんだ、と云う事をまざまざと見せつけられた思いがする。そして日本は〝何と有難い国なんだ〟と思わずにはいられない。

この〝お蔭を戴いている〟〝有難い〟と云う感謝の気持ちを持ち続ける事こそ、報恩感謝の祈りにつながっていくのではないだろうかと思う。

就任のごあいさつ

禰宜　三輪吉治

皆様益々御清祥の御事と拝察致します。

この度鵜戸神宮の御神慮と宮司様の御推挙により、図らずも四月一日付を以って禰宜を拝命致しました。本年は天皇陛下御在位六十年の意義ある目出度い佳年でございます。斯様な年に御由緒ある鵜戸神宮の禰宜と云う重職を拝命致し感激至極であります。

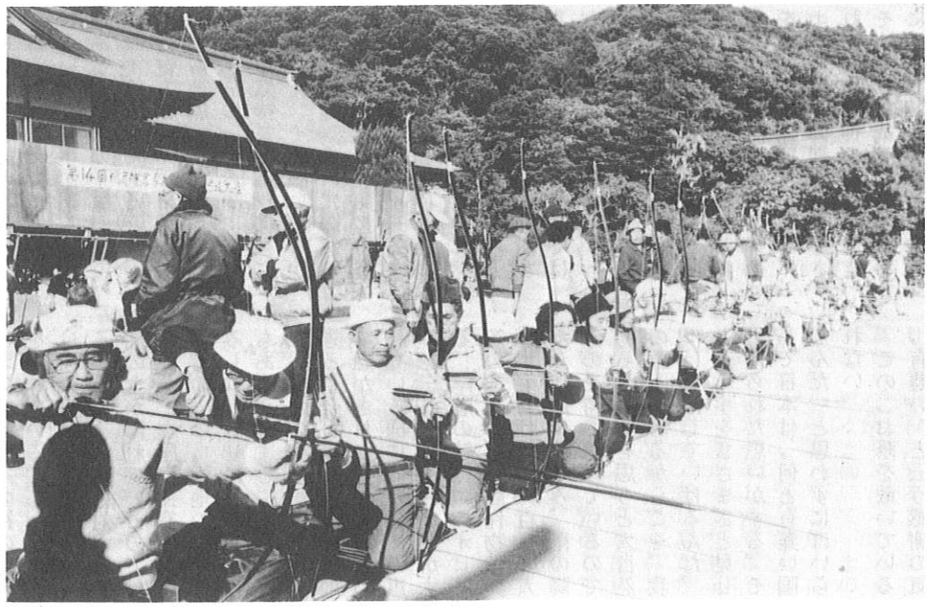
もとより浅学非才の身でございますので、今後は只一管に御祭神の御加護のもと宮司様をはじめ役員総代諸賢、並びに氏子崇敬者各位の御指導を仰ぎ、職員諸氏の御協力を戴き、奉仕に専念し、御神徳の昂揚と御社頭の隆昌に精進致す所存でございます。

何卒、御厚情と御支援を賜ります様お願い致します。

茲に紙上失礼乍ら謹んで御挨拶を申し上げます。

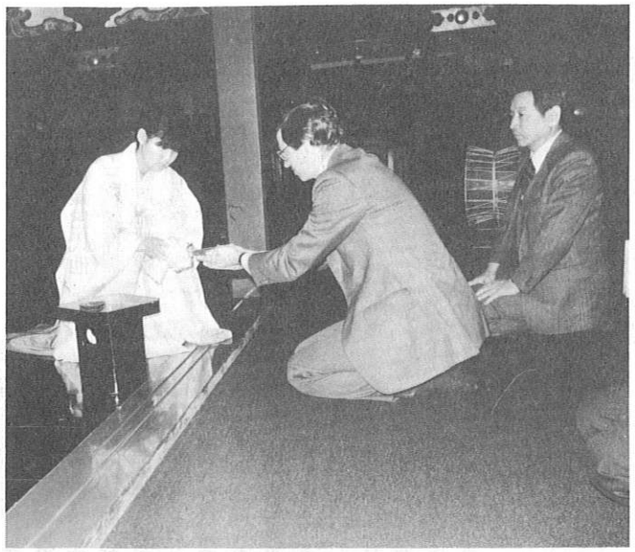
社務日誌抄

一月一日　歳旦祭
一月三日　元始祭
一月五日　昭和女子大学新川穀子氏参拝
一月十日　自治大臣官房企画室長能勢邦之氏他参拝
一月十七日　宮崎交通㈱常務取締役岩切達郎氏他参拝
一月十九日　愛媛県三島神社宮司福永久幸氏、津島町議木田勇氏他十九名参拝
一月二十一日　琴崎八幡宮荒木直馬氏他三十二名参拝
一月二十二日～二十三日　九州地区別表神社宮司会に宮司権宮司出向（於長崎市）
二月一日　例祭
第十四回奉納四半的大会開催
風田、中央地区歌合戦を終夜執行



奉納四半的大会

二月三日　第三十三回剣法発祥鵜戸山顕彰剣道大会執行
二月八日　佐賀県妻山神社宮司永代秀安氏他四十二名参拝
二月十一日　紀元祭
二月十六日　広島東洋カープ松田オーナー古葉監督他必勝祈願祭
二月十七日　祈年祭
三月五日　佐賀県敬神婦人会五十二名参拝、九州地区敬神婦人会大会に宮司他婦人会員出向（於宮崎市）
三月九日　天聖殿教奉賛会近藤仁己氏他五十四名参拝
三月十三日　皇学館高等学校四二〇名参拝、福岡米国首席領事リチャード・A・モーフォード氏、補佐松尾結史氏他参拝



福岡米国首席領事参拝

暑中お見舞申○上げます

職員

宮司	佐師朝規	氏子総代会長
権宮司		氏子総代
総務部長	佐藤美春	〃
禰宜		〃
祭儀・庶務課長	三輪吉治	〃
禰宜		〃
営繕・物品課長	尾方一郎	〃
権禰宜		〃
会計・奉賛課長	谷口正史	〃
守礼課長	佐藤　東	〃
社内権禰宜		〃
営繕・物品課	山口弘美	〃
権禰宜		〃
祭儀・庶務課	永友謙二	〃
〃	中武信明	〃
出仕		〃
祭儀・庶務課	田中克宣	〃
斎女		〃
会計課	川嶋早苗	〃
守礼課	浜門みどり	〃
巫子		〃
物品課	中嶋智子	〃
会計課	平下砂代里	〃
奉賛課	田代智津子	〃
祭儀課	阿部栄子	〃
〃	村田暁美	〃
〃	桝田美智代	〃
〃	岩切一子	〃
巫子見習		
祭儀課	谷口佳寿子	
事務員		
奉賛課	愛甲　遵	
守衛		
営繕課	川畑安盛	〃
〃	杉原与市	崇敬者総代会長
〃	育田時芳	崇敬者総代
〃	平下修三	〃
〃	湯浅好一	〃
〃	浜元隆男	〃
〃	鬼束忠一	〃
〃	宮本ツヤ子	〃
〃	水元イチ子	〃
〃	安部照子	〃

責任役員

代表役員・宮司	佐師朝規	〃
責任役員	河野宗泰	〃
〃	川越国雄	〃
〃	高橋萬二	〃
〃	細田純市	〃
〃	関屋武義	〃
〃	和田三郎	〃
〃	安藤喜俊	〃
〃	鈴木義嗣	〃
〃	鬼束達朗	〃
〃	鶴田正義	〃
〃	外山好光	〃
〃	鬼束健三	〃
〃	津田宗治	〃
〃	水口行光	〃
〃	江口義雄	〃
〃	鈴木直嗣	〃
〃	長友　泰	〃
〃	品原和男	〃
〃	増竹義也	〃
〃	水元福美	〃
〃	高橋良則	〃
〃	秋森万次	〃
〃	金川兵三郎	〃
〃	中野義秋	〃
〃	阿部一二	〃
〃	安藤福好	〃
〃	田中岩夫	〃
〃	黒木良夫	〃
〃	富士　正	〃
〃	上倉与七	〃
〃	川越年秋	〃
〃	南　逸男	〃
〃	黒木被七	〃
〃	谷　雅夫	〃
〃	坂元忠男	〃
〃	門川校雄	〃
〃	古沢家光	〃

三月十五日　責任役員会・北海道上湧別神社宮司鎌田氏他二十三名参拝

三月二十一日　鵜戸地区戦没者慰霊祭

三月二十七日　京都学芸大学庶務課長小林氏参拝

四月六日　下賀茂神社宮司鈴木義一氏参拝

四月十日　総理府技官宮内庁式部職楽部首席楽長上近正氏参拝

四月二十日　萱野神社宮司松田源三郎氏参拝

四月二十四日　中央大学教授堂野達也氏、阿部輝男氏参拝・責任役員会

四月二十九日　氏子崇敬者総代会

五月五日　天長祭

五月八日～九日　鵜戸地区子供がいさみ太鼓を奉納

五月九日　九州地区神職総会に宮司他職員出向（於長崎県）

五月十七日　鹿児島神宮敬神婦人会会長紫桓きみ氏他三十八名参拝

五月二十日　別当宮司先賢慰霊祭

五月二十二日　県神社庁南那珂支部総会に権宮司他職員出向（於青島）

五月二十七日　高橋萬二役員、第三条第三号表彰のため神社本庁表彰式に出向（於明治神宮参集殿）

五月二十七日　山梨県牛倉神社中村宮司他総代三十二名参拝

六月三日～六日、十日～十三日　役員職員研修旅行（秋田、青森方面）

六月九日　国学院大学第四十一期生渡部司津佳氏他四十名参拝

六月十二日　神戸文化友の会十五名参拝

六月三十日　大祓式

天長祭当日陛下の聖寿を祝い万才を三唱

研修旅行を終えて

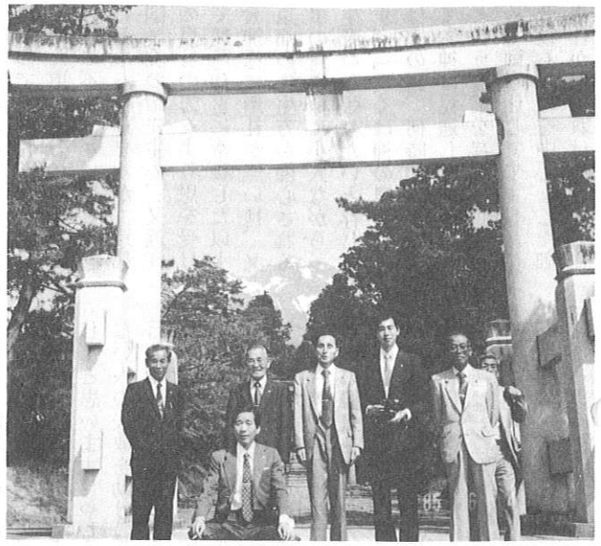
巫子　桝田美智代

六月になり、年に一度の研修旅行に行くことになった。今年は責任役員の方々も御一緒されるということで、にぎやかで楽しい旅行になるだろうと職員一同心はずませ旅立った。

第一日目は宮崎より名古屋に飛び、そこから秋田に向かった。名古屋でお昼をとった後、少し時間があったので空港の外に出てみた。暖かい風が肌にあたり歩き出すと汗がにじみ宮崎とほとんど変わりない気候だった。やがて時間となり秋田へ。空港に着いて方言で話しているご婦人達の会話を耳にしたとき、ここはもう東北だと思った。空港の外は、ひんやりとした風がふいていた。バスに乗りこみ田沢湖へと出発した。

広い湖を見わたすと一面青だった。私の想像する湖の色とは程遠く透明な青だったので、びっくりしてしまった。ガイドさんの話によると酸があまりにも強くこの広い湖に魚は一匹もいないということだった。朝の田沢湖はとても静かだった。霧がかかりぼやけていて何か出てきそうな雰囲気だった。

二日目、八時三十分に田沢湖を出発して、八幡平山



岩木山神社にて

頂へと向かった。山頂に近づくにつれ雪が所々に残っており針葉樹も一段と背が低くなっていた。下向きになっている枝は、真冬の雪の重さを語っているようだった。山頂に着くと道路を隔て雪が一～二メートルくらい積っていて冷たい風が吹いていた。生まれて初めて沢山積った雪を見た私は、感激のあまり靴の底で足跡をつけていた。又、スキーをしている人もいて「六月」ということを忘れてしまうようなそんな一時だった。

バスに帰ると暖房を入れてもらった。口々に、「寒い。冷たいわ。」と言ったり、「すっごい雪だったね。」と言う言葉があちこちから響いていた。バスは進み弘前城へ着いた。お城は遠くから見ると大きく感じたが、近くで見ると以外とこじんまりしており、城内には、槍や鎧、そして古文書類など、いろいろな物が展示してあった。庭園は広く町の人々の憩いの場となっていた。

三日目、研修旅行のメイン、神社へ正式参拝をさせていただいた。弘前よりまず岩木山神社へ。本殿と拝殿が別々になっていて、国の文化財に指定されていた。正式参拝の後、拝殿を見回すと壁に大黒様の絵がかけてあり、その笑い顔が福をよびそうで、とても印象的だった。次に猿賀神社に行った。参拝後、神社の境内を案内してもらうと池があり、その側に桜の木があり、まだ花が咲いていた。

バスは十和田湖へと進んで行った。湖の色は絵の具を溶かしたような藍色だった。湖の近くのレストランでお昼を頂いている途中、支配人さんがあいさつをされ、宮崎の民謡である「いもがらぼくと」を歌われた時には、嬉しくて拍手せずにはいられなかった。楽しいひと時を過した後、バスは奥入瀬川を右に左に眺めながらどんどん進んで行った。大小、何十という滝があり、その一つ一つに名前がついているのにはびっくりした。今の季節は山の木木の色が新緑で、光がさして風がふくと、そよそよと気持ちよさそうに揺れていた。

バスは八甲田山を下りこの旅最後の参拝場所である善知鳥神社に着いた。普通神社の本殿とかは以外と薄暗くて、陰気な感じがするのだが、この善知鳥神社は明るかった。見回すと、目につくのは白い壁、白い柱、そして朱色の三方。又号鼓が少し変わっていて、これから何が始まるのだろうか？と思わせるような派手な太鼓の音だった。

私達は三日間の予定を無事すませ、東北最後の夜を過ごす浅虫のホテルへとやって来た。

最後の夜にふさわしく夜の宴会は盛り上がり、心に残る楽しい思い出ができた。

四日目、いよいよ宮崎にむけて出発。三沢から羽田にとび宮崎に帰って来た。すぐさま目に入るフェニックスの木。堀切峠を過ぎ、一面に太平洋の大海原を目にした時、誰かが「あー、やっと安心できるわー。」と、一声発っした。そして楽しかった三泊四日の研修旅行は終わった。

新職員紹介

鵜戸神宮と神社の本質

出仕　田中克宣

私が皇典講究所京都国学院を卒業し、この鵜戸神宮に奉職してから約三カ月が過ぎました。宮崎に来た当時は鵜戸神宮の事や職員の方々の事等、さっぱり分からなかった上に宮崎の言葉も京都人の私には理解出来ませんでした。祭儀関係にしても、今まで実習していた京都の石清水八幡宮とは勝手が違い、古い式たり等があります。例えば奏楽は雅楽ばかりを奏して居りましたが、当神宮では雅楽を

始め神楽笛と楽太鼓を使う神楽もあります。又、地理的にも大神様の鎮まり座す御本殿が私達の居る社務所、社宅等よりも下に有る神社中では一風変わった聖地で、玉橋から参道階段を下る時左側に社殿を見下げる様で申し訳け無い気が致しました。その他色々と不思議に思ったり、すばらしいと思う事が多々有りましたが、三ヵ月過ぎた今、何とか少しずつ当神宮に慣れて来ました。この様に今まで御奉仕して居た神社とは大きく違うので、奉職前に心掛けていた事が十分に生かせず、自分の不十分さに怒りを感じる事も有りますが、京都国学院の諸先生方、又近江の自社の方々より恩を受けて鵜戸神宮に奉職した以上大神様に無礼が無い様、又京都の先生方が傷心される事の無き様に小人ながら一生懸命頑張りたいと存じます。「吹くは神の息、降るは恵の露、何時如何なる所でも神は見通し聞き通し」と伝う言葉を昔から心に密めて御奉仕して来ました。今後も神様を中心とした御奉仕が出来れば幸と思います。そしてこの様な儀礼、信仰的な事の他に、仕事上での人間関係又責任の重さも感じました。学生時代は「私はあの人がイヤだから話したくない。」でも許されたかも知れませんが、今後、責任ある仕事を行う上で当然ミス、失敗、忘れが出ます。誰でも人間である以上仕方ない事で、そんな時「イヤだから知らない」と言って居たのでは神宮全体が上手に運営出来なく成ると思います。大袈裟な事では無く時計の歯車の様に一つ一つが咬み合ってこそ針がスムーズに動く事と同じだと思います。やむを得ない人の失敗を助け教えて行く中に神が座される素晴らしい聖気が漂うのだと思いますし、人々が助けを求める神社である以上、そうでなければならないと思います。神を中心として人間道徳の聖気を以って人々の心の世界に徳の種を蒔く事が神社の本質であり神職の本質だと考えますし、後にその種は一粒万倍に成って神の徳が人々に授かり、人々がその徳の稲穂を自ら刈られる事を心から祈ります。

鵜戸神宮へ奉仕して

巫子　岩切一子

昨年、高校を卒業後、某企業へ勤めておりましたがある事情の為、そこを退職すると同時に恩師と知人の紹介で、当神宮へ勤める事になりました。月日のたつのは早いものであっという間に四ケ月が過ぎてしまいました。

何分、前の会社は、神宮とは全然違う職種であった為、何から手を付けてよいのか随分惑いました。先ず大祓詞の読み方、色々な作法、神道に関する事、中でも苦労したのが、笛と太鼓でした。巫子として、笛と太鼓は欠く事のできない仕事、音が出ないからと言って逃げる事も、放棄する事もできないので、すごく悩みました。

太鼓の方は、リズムさえ覚えれば後は、容易かったけど、笛はそうはいかない。諸先輩方々の御指導により最近、どうにか自分なりに満足できる様な音色になりはしたが、まだまだ、先輩方の足元にも及ぶ事ができないので、尚一層、頑張りたいと思います。

今だ、諸々の仕事や神事について、わからない事が多々あるので、毎日少しづつでもいいから、吸収して奉仕していきたいと思います。

谷口佳寿子巫子見習

生年月日
昭和三十九年七月二十一日
家族
父、母、姉、祖母
趣味
レコード鑑賞、お菓子作り
常の信条
初心忘るべからず

編集後記

うっとうしい梅雨の時期に時折り降りそそぐ灼熱の太陽はもう真夏を感じさせる今日この頃です。皆様いかがお過ごしでしょうか。ここに社報第二十一号をお届け致します。

本年度は天皇陛下御存位六十年を慶賀すべき佳年でございます。本県におきましても、当宮の鎮ります日南海岸の国定公園指定三十周年記念、又、郷土が生んだ偉大な浪漫歌人若山牧水生誕百周年記念等目出度いことの重なる喜ぶべき年であります。あちこちで数多くの祝賀行事が予定されていますが、当宮ではこれを一つの節目と肝に銘じて、今後更に宮司以下職員一同正しい社頭の繁栄に努力していきたいと思っています。

氏子崇敬者の方々の御健勝をお祈り申し上げますと共に、皆様方の暖かい御指導をお願い致します。

（谷口）